

## ヴェネツィア・ワークショップ

廣瀬 富男

Buongiorno! Thank you so much for having me as the first speaker of the workshop. You may already have experienced this, but I got lost a couple of times yesterday while I was walking around the city, which is like a maze. For this presentation, however, I'll do my utmost to be as clear as possible, so that you won't get lost while I am talking. ...

最初の発表者ということもあり、何か気の利いた言葉で始めたかった。10月10・11日の2日間、生成文法系のワークショップ 'Variation in P' が、ヴェネツィアはUniversità Ca' Foscariで開催された。一捻りしたのは、恐らくはトークの名手として知られる共著者のRose-Marie Déchaineが現れると踏んでの発表順だったのだろうと勘ぐり、会場に居もしない彼女の向こうを張ったのである。

今回の発表は、アルゴンキアン語族のBlackfootとPlains Creeの前置詞要素の統語分析で、ワークショップ・テーマとしての問いの一つ、「(微視的)比較言語学的データは、前置詞句の内部構造および節構造との関係についての我々の理解をどのように深めることができるか?」に直結した内容である。Plains Creeの前置詞要素が「語彙的」であるのに対し、Blackfootの前置詞要素は「機能的」かつ「直示的 (deictic)」で、それが故に、「変異 (mutation)」を起し、前置詞句と並行

的な内部構造を持つ節の時制要素の位置に生じる、そういう主旨で20分ほど話をした。その後、幾つか質問を受けたが、Guglielmo Cinqueからは、BlackfootとPlains Creeの違いが「巻き上げ式の (roll-up)」移動の有無に由来する可能性について尋ねられ、あまりの「らしさ」に思わず笑みがこぼれた。結局、幾つか理由を挙げ、やんわりと否定したのだが、この著名で、好々爺然とした言語学者のすこぶる我田引水的な発想がたまらなく愛



どちらに向かっても、行き着く先は...

---

おいしい。

さて、自分の発表が終われば、緊張も解れ、あとは残りの発表に耳を傾けるばかり。2日間でポスターを含めても1ダースと少しの発表の中、やはり一番面白かったのは、Peter Svenoniusの基調発表で、前置詞の「拡大投射 (extended projection)」を構成する機能範疇は、その数や種類は言語間で同一であるが、拡大投射を構成する主要部になる言語と、そうでない付加詞になる言語があると主張する。これは、Cinque流の cartography に一石を投じる仮説で、筆者自身の名詞の拡大投射の捉え方に通じるものでもあり、今後の

展開が楽しみである。

一つ嬉しいことがあった。発表後の休憩中にスペイン人大学院生の Juan Romeu Fernandez から「お前は、あの Hirose 2007 のヒロセなのか？ LI squib の？」と訊かれ、そうだと答えると、「あれを基に博士論文の1章を書いた。あと一週間か十日で書き終えるから、出来上がり次第、メールで送る」と言う。案の定、それっきり連絡はないのだが (笑)、若手研究者からこんな風に声を掛けられると、先にこの分野を志した者の役目を少しは果たせたような気がするのである。

\*\*\*\*\*